

## 中学生の養育者への信頼感と攻撃性の関連

石橋茉奈・石田 弓

Relation between trust people who brings up junior high school students and their aggression

Mana Ishibashi and Yumi Ishida

本研究は、中学生の養育者への信頼感と攻撃性の関連を検討することを目的とし、中学生313名に質問紙調査を実施した。研究1では、養育者への信頼感と攻撃性の関連は弱いことが示された。研究2では、養育者から甘えを拒否される場面で生じる感情と自他への攻撃行動を場面想定法を用いて測定し、養育者への信頼感との関連を検討した。そして、養育者への信頼感が高ければ、養育者への猜疑心を持つことが少なくなることが示された。また、自傷行為などの自己に向けられた攻撃行動の生起には、養育者への信頼感や甘えが拒否された後の感情が影響せず、養育者という限定された対象ではなく、個人内特性としての信頼感が影響している可能性が示された。一方、反抗行動の生起には、強い不満が影響しており、信頼感の影響はほとんどないことが示された。また、自責行動の生起には、あきらめを感じるものが影響していることが示された。自分の甘え行動が養育者に拒絶されたことは仕方ないと、あきらめの感情を持つことで、甘えるべきでなかったと思い、自分を責める行動につながると考えられた。

キーワード：中学生、養育者、信頼感、攻撃性、甘え

### 問題・目的

#### 青年期前期の攻撃性と親子関係

いじめや暴力行為など、中学生の攻撃行動が問題となっている。文部科学省によれば、平成24年度の学校内外における暴力行為は小学校で8,296件、中学校で38,218件、高等学校で9,323件であった。このように中学生の攻撃行動件数が多いのは何故であろうか。

中学生の攻撃行動について考える際に、青年期前期という発達段階を考慮する必要がある。青年期前期は第二次性徴に伴う身体的変化による戸惑いに加え、第二の分離個体化 (Blos, 1967) が始まるなど親との関係性が変化する時期でもある。安立 (2001) は、Storr (1968 高橋訳 1973) の記述を踏まえ、他者との距離の調節困難が攻撃性の表出と制御を困難にすると述べている。また、攻撃性は他者との関係において発達し、生きていくための対象関係的機能を持ち、青年期においては自立と依存の葛藤の中で親に対して激しい攻撃性が示される (廣井, 2002)。

このように、攻撃性の表出や制御に他者との関係性が関連してくるならば、青年期前期においては親との関係性が攻撃性の表出に影響することが考えられる。

### 攻撃性の分類とモデル

安立 (2001) は、心理臨床における攻撃性の捉え方をベースとして、攻撃性を広義に人間の持つ心のエネルギーとして「破壊的な力」としてだけでなく「能動的な力」として捉えている。さらに、攻撃性の向けられる方向性 (自己/対象)、表出の有無 (表出傾向/保持傾向) の2次元から攻撃性を分類し、(a) 能動性、(b) 自己攻撃性-表出傾向、(c) 自己攻撃性-保持傾向、(d) 対象攻撃性-表出傾向、(e) 対象攻撃性-保持傾向の5要素からなるモデルを提示している。このモデルは「能動的な力」と「破壊的な力」を捉えられること、他者や外部へ向かう攻撃性だけでなく、自己へ向かう攻撃性をも捉えていること、また直接表現されるものだけでなく、潜在的な状態も含めて攻撃性を捉えていることから、攻撃性を包括的に捉えることができると考えられる。そこで、本研究では安立 (2001) のモデルで攻撃性を捉えていくこととする。

また、攻撃性に関する質問紙調査の注意点として、攻撃性の評価時には社会的な防衛が起こり、意識的あるいは無意識的に、自分の持つ攻撃性を低めに評価する傾向があると指摘されている (山崎, 2002)。本研究ではこの点を考慮し、対象者の実際の攻撃行動の頻度や程度を測定するのではなく、場面想定法を用いて、仮想の場面において「あなたは次のような行動をどのくらいと思うか」と質問して攻撃行動を測定することとした。

### 親子の信頼感と攻撃性

近年、親子関係において重要な要因の1つとして信頼関係があげられており、特に親子の信頼関係が青年期前期までに形成できていることが、子どもの心理的健康や行動上の問題などに大きく影響していることが指摘されている (浜崎・田村・吉田・吉田・岡本・安藤・倉成, 2012)。例えば、渡邊・平石・信太 (2009) は中学生とその母親を対象に、母親の養育スキルと子どもが認識している母子相互信頼感や心理的適応の関連を検討し、男子では子どもの母子相互信頼感と自尊感情、不適応感に関連があり、女子では子どもの母子相互信頼感と不適応感に関連があることを示した。

また、水野 (2003) は心理学研究における信頼概念について概観し、信頼を個人内特性として捉える立場と、関係特性として捉える立場に大きく分けられると論じている。個人内特性の立場では、信頼を個人がある程度安定して持つ期待や信念と捉え、関係特性の立場では、信頼をある個別の人間関係が安定して持つ性質と捉えている。

個人内特性から信頼感を捉えた立場として、清瀧 (2008) は、青年期における攻撃行動および自傷行為と対人的信頼感との関連を検討することを目的とし、大学生を対象に質問紙調査を行った。その結果、身体的攻撃を行うものは不信感が高く、言語的攻撃を行うものは自分への信頼感が高く、自傷行為経験のあるものは自分への信頼が低く不信が高いことが示された。これら3つの攻撃性の表出の仕方、個人の攻撃行動の選択においては、自分に対する信頼がどのように個人内にあるのか、どのように感じられているのかが影響している可能性が示唆されている。また、谷本・笠井 (2008) は、青年期における人間信頼感、自己存在感と自他への攻撃性との関連を検討することを目的とし、大学生を対象に質問紙調査を行った。その結果、人間不信と自己存在希薄感が他者への攻撃性に影

響していることが示された。

一方、相手との関係性に応じて信頼感は異なると考えられる。信頼を関係特性として捉える立場では、Cynthia & Walter (1982) , Rempel, Holmes & Zanna (1985) が個別の関係における信頼感の尺度の生成を試みている。これらの研究では、特定の他者を想定させる尺度を用いて個別の関係 (specific relationship) における信頼を測定した上で、信頼の因子構造が一般的な特性としての信頼と個別の関係における信頼では異なっていることや、信頼の構造が男女で異なっていることなどを指摘している (水野, 2003) 。また、酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村 (2002) では、中学生が母親、父親、親友に対して抱く信頼感と学校適応との関連を検討し、信頼感が影響を与える学校適応の変数が、母親、父親、親友によりそれぞれ異なっていることが示されている。

清瀧 (2008) や谷本・笠井 (2008) の研究で、個人内特性としての信頼感と攻撃性の関連が示唆されているが、信頼を関係特性として捉え、個別の関係によって信頼感は異なり、信頼感と攻撃性の関連の仕方が異なるとも考えられる。青年期前期には特に親や親役割となっている養育者への信頼感が変化しうると考えられる。

なお、現代の中学生の家庭環境は多様化していることから、本研究では調査対象者である中学生に配慮し、家族を1人思い浮かべさせ、対象者にとって親役割となっていると思われる養育者への信頼感を検討することとした。また、酒井ら (2002) を参考に、中学生の養育者への信頼感を、以下の2つを含んだ概念として定義した。“養育者にとって自分は信頼される価値のある存在と思えるかどうか”という中学生の自己評価と、“自分にとって養育者は信頼できる存在であると思えるかどうか”という養育者への評価 (他者評価) 。

### 日本の親子関係と「甘え」

土居 (1971) の「甘え」理論は、日本人の対人関係の問題を検討していく上で重要な概念であると考えられている。「甘え」は“他者の好意に依存し、それをあてにする”ことを意味し、乳児に限らず成人した後にもみられる (土居, 1971) と考えられている。土居 (2001) は後に「甘え」を“対人関係において、相手の好意をあてにして振舞うこと”と再定義している。甘えるためには相手が必要であり、「甘え」の性質上受身的にならざるを得ない。青年期前期においては大人に対してアンビヴァレントな感情を抱いている子どもが多く (林, 2012) , また甘えさせる側の大人も、子どものような変化に伴い適切な心理的距離をとることが難しくなり、甘えを受け入れない対応を取ることもある。攻撃行動には様々な要因が関連しているが、青年期前期においては「甘え」に関してアンビヴァレントな感情を抱きやすいことから、本研究では「甘え」が生じる場面における攻撃行動を取り上げて検討する。中でも、親から拒否されているという認識が、青年期の子どもの攻撃性に影響を及ぼすことが指摘されている (Hale, Valk, Engels, & Meeus, 2005) ことから、養育者に甘えが拒否される場面における中学生の攻撃行動について検討する。

また、「甘え」行動は目的によって「情緒的甘え」と「道具的甘え」に分類されている (小林・加藤, 2007) 。「情緒的甘え」は他者との情緒的なやりとりを行うことを目的とする「甘え」であり、相手が自分の甘えたい気持ちを読み取ってくれた時点で、当初の甘え欲求が満たされるものと定義されている。また、「道具的甘え」は甘えることで他者に自己の問題解決のための行動を取ってもら

うことを目的とする「甘え」であり、相手が実際に期待する行動を取ってくれることで当初の甘え欲求が満たされるものと定義されている。小林・加藤 (2007) によれば、加藤 (1998) は、大学生までは少なくとも意識レベルでは「道具的甘え」が甘え行動の中心であり、情緒的甘えは年齢が上がるにつれてその存在や意義が理解されるようになると述べている。よって、本研究では「道具的甘え」を扱うこととする。

### 甘えが拒否される場面で起こる感情と攻撃行動

加藤 (2007) は、「甘えプロセス・モデル」の中で、甘えが拒否されたときについて以下のように整理している。甘え行動が拒否された場合にはネガティブな感情が喚起され、その気持ちを内省することで3つの異なった情動が起こる。

まず、自己非難的情動がある。これは、甘えたことへの後ろめたさ、甘え方の程度の過剰さなどにより、相手に負担をかけたり、不快にしたりするといった認知が生じたときに起こりやすく、「済まない」、「甘えすぎたな」、「悪かったな」といった気持ちが含まれる。2つ目が、他罰的情動である。これは、甘える側がすでに相手に甘えることをあきらめた場合に経験されると想定され、「うらむ」、「ひがむ」などの気持ちが含まれる。3つ目が、両面価値的情動である。これは、もし可能ならどうにか相手に受け入れてもらいたい、あるいは受け入れさせたいという気持ちの表れと解釈でき(土居, 1971)、「すねる」、「ひがむ」、「ふてくされる」などの気持ちが含まれる。

また、この3つ以外の反応として、人は加齢に伴い自分の「甘え」を意識し自制することができるため、相手に拒絶されてもそれを受け入れることができることもある。そうした場合「仕方がない」といったあきらめ感を持つ。

大迫・高橋 (1994) は、大学生を対象に、対人的葛藤場面における対人感情及び葛藤処理方略に及ぼす「甘え」の影響について検討した。6人の葛藤対象人物に叱られたり怒られたりしている葛藤場面を想起させ、そのとき感じる感情と、葛藤処理方略を測定した。対象によりどのような感情を感じやすいかは異なっていた。また、葛藤処理方略に関して、父親や母親、兄弟姉妹に対しては怒る、批判するなどの他讓志向方略が用いられやすくなることが示された。しかし、大迫・高橋 (1994) が指摘するように、相手に対する否定的感情を実際に他者に表出するかどうかは不明であり、またどのような葛藤処理方略を用いるかは相手との関係性に左右されると考えられる。

草野・石原 (2003) は中学生の対人ストレスが攻撃行動に及ぼす影響を検討し、男女ともに親子関係でストレスを感じるものが攻撃行動に影響していると示した。養育者から甘えを拒否される体験によってストレスを感じると想定できるが、そのストレスの度合いや感じ方は親との関係性によって異なると考えられる。例えば松田・児島 (2003) は叱る側と叱られる側の信頼関係について検討し、叱り方のパターンの、1つである「感情表出」に関しては、叱りの受け止め方が親との信頼関係の有無によって影響を受けると示している。養育者から甘えを拒否される場面においても、親への信頼感の程度によって受け止め方が異なると予想される。中学生は養育者に甘えることに対してアンビヴァレントな感情を持ちやすいとされており、養育者から甘えを拒否される場面で生じる感情と自他への攻撃行動を測定し、それらが養育者への信頼感とどのように関連しているかについて検討する。

## 本研究の目的

信頼感と攻撃性に関する研究において、個人内特性の立場から研究はされているものの、関係特性の立場からの検討はなされていない。しかし、対象によって信頼感の程度や他の要因との関連も異なると考えられる。また、攻撃性はその表出の仕方が問題となり、攻撃性を持っていても、実際に表出するかどうかは相手との関係性によると考えられる。

本研究では、青年期前期に第二の分離個体化が始まり、親との関係性が変化することから、親や親役割をとっている養育者への信頼感と攻撃性の関連について検討することを目的とする。そこで、まず研究1では、親子関係の一側面として信頼関係を取り上げ、中学生が持つ養育者への信頼感と自他への攻撃性の関連について検討する。研究2では、中学生を対象とし、養育者への信頼感と甘え行動が拒否された後の感情や攻撃行動との関連について検討する。

## 研究1

### 目的

中学生の養育者への信頼感の程度が、攻撃性のどのような側面と関連しているかについて検討する。以下の2点を仮説として立てた。身体的攻撃を行うものは対人的な不信感が高く、自傷行為経験のあるものは自分への信頼が低く対人的な不信感が高いこと(清瀧, 2008)や、人間不信が他者への攻撃性に影響を与えていること(谷本・笠井, 2008)から、(a)養育者への信頼感が高い者は、信頼感が低い者よりも自他への破壊的な攻撃性が低い。また、自己主張の側面を含む言語的攻撃を行うものは自分への信頼感が高いこと(清瀧, 2008)や、反社会的な人に抗議するなどの社会的に容認された行動である向社会的攻撃を行う中学生は、親から褒められるなど中学生から見て好ましい親子関係をもつことが示されており(小西・野村, 1983)、好ましい親子関係であれば養育者への信頼感が高いと想定されることから、(b)養育者への信頼感が高い者は、信頼感が低い者よりも能動的な攻撃性が高い。

### 方法

**対象者** 調査協力の依頼に承諾が得られた、A県内の公立中学校1校に在籍する中学1～3年生313名に調査を実施した。

**手続き** 中学校の担任教師が教示を行い、クラスごとに集団法で回答させた。対象者への配慮から、家族を1人思い浮かべてもらい、対象者にとって親役割となっていると思われる養育者への信頼感を測定した。

### 質問紙の構成

1. **養育者への信頼感尺度**: 酒井ら(2002)の研究で使用された、親子間の信頼感尺度の子ども用を用いた。この尺度は、子ども本人が母親・父親それぞれとの関係における信頼感を測定する子ども用と、母親・父親のそれぞれが自分の子との関係における信頼感を評定する母親用・父親用がある。この尺度では信頼感を、“相手にとって自分は信頼される価値のある存在と思えるかどうか”という自己評価と、“自分にとって相手は信頼できる存在であると思えるかどうか”という相手への評価(他者評価)の2つの視点から測定した。全5項目であった。質問項目中の「父親」や「母親」は

「家族の人」に変更した。まず、家族を1名思い浮かべさせ、その家族について、『全く当てはまらない』から『非常によく当てはまる』までの7件法で回答させた。

2. 攻撃性質問紙：安立 (2001) によって作成された「攻撃性質問紙」を用いた。この尺度は、(a) 自己主張・適応行動などの能動性を測る「積極的行動」、(b) 自己攻撃性 (内包傾向) を測る「自責感」、(c) 自己攻撃性 (表出傾向) を測る「自己破壊行動」、(d) 対象攻撃性 (内包傾向) を測る「猜疑心」、(e) 対象攻撃性 (表出傾向) を測る「対象攻撃行動」の5要素からなり、表出傾向については実際に行動するかどうかを問うのではなく、あくまで欲求について問う項目である。全32項目であった。この尺度は大学生を対象に作成されており、中学生が回答する上で分かりにくい表現については、項目の内容が変わらない程度に変更を加えた。『全く当てはまらない』から『非常によく当てはまる』までの6件法で回答させた。

3. フェイス項目：性別、学年について選択式で回答を求め、「家族の人」として想定した人物を自由記述で回答させた。

## 結果

### 分析対象者

回答の得られた313名のうち、家族を1人思い浮かべるよう教示した際に、養育者を思い浮かべたと考えられる者を分析対象者とした。そのため、家族の人について記入する欄に養育者でない人を記入した者や、回答がなかった者は分析対象から除外した。また、回答漏れがある者も分析から除外した。分析対象者は219名 (男子103名、女子116名。1年生66名、2年生66名、3年生87名) であった。

### 各尺度の検討

養育者への信頼感尺度5項目に対して主成分分析を行った。第1成分の寄与率が69.4%であり、一次元性のものと解釈した。尺度の構造は酒井ら (2002) と同様であった。項目の内的整合性を検討するために $\alpha$ 係数を算出したところ、 $\alpha=.87$ であり、尺度の信頼性が確認された。これ以降の解析では、酒井ら (2002) にならい、5項目を加算した得点を信頼感尺度得点とした。信頼感尺度得点の平均値と標準偏差をTable1に示した。

次に、攻撃性質問紙のうち、フロア効果がみられた3項目 (「自転車などで無我夢中で乱暴な運転をしたいと思うことがある」、「自分の髪を引っ張ったり、引き抜いたりしたくなることがある」、「自分の皮ふをかきむしりたくなることがある」) を分析から除外した。残りの30項目に対して因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を実施した (Table2)。第1因子は「腹の立つ相手には、いやみとか皮肉を言ってやりたいと思う」など、他者に対する攻撃を示す14項目からなり、「他者攻撃性」と命名した。第2因子は「自分のやりたいことに向かって突き進んでゆく方である」など、積極的な行動を示す7項目からなり、「積極的行動」と命名した。第3因子は「他人とのトラブルがあると、自分を責める方である」など、自分を責める行動を示す5項目からなり、「自責感」と命名した。各下位尺度の $\alpha$ 係数を算出したところ、「他者攻撃性」は $\alpha=.89$ 、「積極的行動」は $\alpha=.78$ 、「自責感」は $\alpha=.75$ であり、尺度の信頼性が確認された。これ以降の解析では、各下位尺度の項目平均値を下位尺度得点とした。下位尺度得点の平均値と標準偏差をTable3に示した。

Table 1  
養育者への信頼感尺度得点の平均値と標準偏差

	性別		学年		
	男子	女子	1年	2年	3年
			<i>M(SD)</i>		
	27.36	26.22	28.97	26.35	25.39
	(5.15)	(5.86)	(4.06)	(5.71)	(5.94)

Table 2  
攻撃性質問紙の因子分析結果(主因子法・プロマックス回転)

		I	II	III
他者攻撃性	21 腹の立つ相手には、いやみとか皮肉を言っ	.810	.052	-.156
	てやりたいと思う。			
	27 自分と考えの合わない人のことを、心	.668	-.020	-.203
	から受け入れることはできない。			
	7 物事がうまくいかないときイライラし	.660	-.065	-.029
	て、すぐ人にあたる。			
	32 特定の誰かが気に入らなくて、反抗	.650	-.071	.055
	的な態度をとることがある。			
	16 他人のことを、心から信頼すること	.635	-.194	-.016
	はできない。			
	13 まわりの人が敵に見えてしまうこと	.625	.035	.180
	がある。			
	4 批判や忠告をされると、内心うら	.616	-.035	.085
んでしまう。				
12 腹の立つことをされると、後々まで	.614	.117	-.020	
根に持つ方である。				
25 親しみを寄せすぎると、警戒して	.603	-.117	-.091	
しまう。				
9 人に対して、疑い深いところがあ	.579	.058	-.015	
る。				
15 何かにつけ、心が傷つくことが多	.506	-.013	.323	
い。				
5 めちゃくちゃな行動をしたくなる時	.490	.214	.095	
がある。				
2 すぐに相手の言葉じりをとらえて、	.480	.232	-.083	
つかかかってやりたくなる。				
23 いつも何か刺激を求める。	.460	.156	.033	
積極的行動	11 自分のやりたいことに向かって突き	.033	.734	-.057
	進んでゆく方である。			
	1 何事にも恐れず立ち向かっていく	-.174	.678	-.134
	方である。			
	8 どちらかといえば活動的な方であ	-.034	.600	.060
	る。			
26 まわりの人が何と言おうと自分の	.221	.563	-.084	
考えは押し通すほうである。				
14 正しいと思うことは人にかまわず	.220	.551	.017	
実行する。				
19 やりたいと思ったことは行動に移	-.086	.516	.190	
す方である。				
28 いろいろな世間の活動がしてみたい。	-.092	.444	.283	
自責感	3 他人とのトラブルがあると、自分を	-.225	.039	.713
	責める方である。			
	29 他人が不快そうにしていると、自	-.127	.136	.703
	分が悪かったのではないかと思う。			
	18 過去のことを振り返って後悔する	.177	-.101	.580
ことが多い。				
31 不愉快なことでも無理にがまんし	.075	.097	.549	
てしまう。				
22 自分はだめな人間だと思う。	.273	-.181	.470	

  

因子間相関	I	II	III
I		.086	.482
II			.087

Table 3  
攻撃性尺度得点の平均値と標準偏差

	性別		学年		
	男子	女子	1年	2年	3年
			<i>M(SD)</i>		
他者攻撃性	2.85 (.71)	3.16 (.90)	2.94 (.79)	3.19 (.82)	2.94 (.85)
積極的行動	3.60 (.72)	3.48 (.73)	3.54 (.67)	3.54 (.70)	3.53 (.79)
自責感	3.63 (.92)	4.16 (.82)	3.56 (.91)	3.99 (.85)	4.12 (.86)

## 性差・学年差の検討

1. 養育者への信頼感：性別と学年を独立変数，信頼感尺度得点を従属変数として， $2 \times 3$  の分散分析を行った。分散分析の結果，学年の主効果が有意であり，効果量が中程度であった ( $F(2, 213)=8.52, p<.001, \eta^2=.073$ )。多重比較の結果から，1年生が2年生や3年生よりも有意に得点が高かった。

2. 攻撃性質問紙：性別と学年を独立変数，「他者攻撃性」下位尺度得点を従属変数として， $2 \times 3$  の分散分析を行った。その結果，有意な交互作用がみられたが，効果量は小さかった ( $F(2, 213)=4.22, p=.016, \eta^2=.037$ )。交互作用がみられたため単純主効果の検定を行ったところ，女子において学年の単純主効果が有意であり ( $F(2, 213)=5.38, p=.005, \eta^2=.051$ )，2年生が3年生より得点が高かったが，効果量は小さかった。また，1年生において性別の単純主効果が有意傾向であり ( $F(1, 213)=2.76, p=.098, \eta^2=.013$ )，女子が男子より得点が高かったが，効果量は小さかった。さらに2年生において性別の単純主効果が有意であり ( $F(1, 213)=12.27, p=.001, \eta^2=.058$ )，女子が男子より得点が高かったが，効果量は小さかった。

性別と学年を独立変数，「積極的行動」下位尺度得点を従属変数として， $2 \times 3$  の分散分析を行った。その結果，交互作用も主効果も有意ではなく，効果量は小さかった。

性別と学年を独立変数，「自責感」下位尺度得点を従属変数として， $2 \times 3$  の分散分析を行った。その結果，有意な交互作用がみられたが，効果量は小さかった ( $F(2, 213)=3.31, p=.038, \eta^2=.026$ )。交互作用がみられたため単純主効果の検定を行ったところ，男子において学年の単純主効果が有意であり ( $F(2, 213)=10.23, p<.001, \eta^2=.097$ )，3年生より1年生が得点が高かった。また，1年生において性別の単純主効果が有意であり効果量が中程度であり ( $F(1, 213)=16.89, p<.001, \eta^2=.080$ )，女子が男子より有意に得点が高かった。さらに2年生において性別の単純主効果が有意であり ( $F(1, 213)=7.52, p=.007, \eta^2=.036$ )，女子が男子より有意に得点が高かったが，効果量は小さかった。

## 養育者への信頼感と攻撃性の関連

養育者への信頼感と攻撃性の関連を検討するために，信頼感尺度得点と攻撃性質問紙の下位尺度得点の相関係数を算出した (Table4)。養育者への信頼感と「他者攻撃性」の間には男女ともに有意な弱い負の相関がみられた。養育者への信頼感と「積極的行動」の間には，女子のみ有意な弱い正の相関がみられた。養育者への信頼感と「自責感」の間には男子のみ有意な弱い負の相関がみられた。学年別に相関係数を算出したところ，養育者への信頼感と「他者攻撃性」の間には2年生で有意な弱い負の相関がみられ，3年生で有意な中程度の負の相関がみられた (Table5)。養育者への信頼感と「積極的行動」の間には，3年生のみ有意な弱い正の相関がみられた。養育者への信頼感と「自責感」の間には有意な相関がみられなかった。

次に，信頼感の程度により攻撃性質問紙の下位尺度得点に差があるかを検討した。信頼感尺度得点の中央値の28を基準とし，27点以下を信頼感低群 ( $N=105, M=22.29, SD=4.54$ )，28点以上を信頼感高群 ( $N=114, M=30.88, SD=2.18$ ) とした。信頼感尺度得点と攻撃性下位尺度得点の相関分析より，性別や学年によって2つの尺度の相関関係が異なることが示された。学年ごとにみると，1年生では2つの尺度の間に有意な相関がみられなかったが，2年生，3年生では有意な相関がみられた

Table 4

養育者への信頼感尺度と攻撃性質問紙の相関	攻撃性					
	他者攻撃性		積極的行動		自責感	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
養育者への信頼感	-.261**	-.322**	.176	.228*	-.212*	-.177

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

Table 5

学年ごとの信頼感尺度得点と攻撃性質問紙下位尺度得点の相関	攻撃性								
	他者攻撃性			積極的行動			自責感		
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
養育者への信頼感	-.107	-.303*	-.436**	.108	.198	.282**	-.018	-.210	-.188

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

ことから、1年生を低学年、2年生と3年生を高学年として2つの群に分けた。

攻撃性の各下位尺度に、養育者への信頼感の高低や性別、学年がどう関連しているかを検討するため、信頼感の高低、性別、学年を独立変数、攻撃性の3つの下位尺度得点を従属変数として3要因分散分析を行った。

信頼感の高低、性別、学年を独立変数、「他者攻撃性」下位尺度得点を従属変数として、 $2 \times 2 \times 2$ の分散分析を行った。その結果、交互作用は有意ではなかった。信頼感の高低の主効果が有意であり ( $F(1, 211) = 7.21, p = .008, \eta^2 = .032$ )、信頼感低群が高群より得点が有意に高かったが、効果量は小さかった。また、性別の主効果が有意であり ( $F(1, 211) = 8.40, p = .004, \eta^2 = .037$ )、女子が男子より得点が高かったが、効果量は小さかった。

信頼感の高低、性別、学年を独立変数、「積極的行動」下位尺度得点を従属変数として、 $2 \times 2 \times 2$ の分散分析を行った。その結果、交互作用は有意ではなかった。信頼感の高低の主効果が有意であり ( $F(1, 211) = 6.18, p = .014, \eta^2 = .027$ )、信頼感高群が低群より得点が有意に高かったが、効果量は小さかった。

信頼感の高低、性別、学年を独立変数、「自責感」下位尺度得点を従属変数として、 $2 \times 2 \times 2$ の分散分析を行った。その結果、学年と性別の有意な交互作用がみられたが、効果量は小さかった ( $F(1, 211) = 4.54, p = .034, \eta^2 = .018$ )。交互作用がみられたため単純主効果の検定を行ったところ、男子において学年の単純主効果が有意であり ( $F(1, 211) = 15.23, p < .001, \eta^2 = .073$ )、高学年が低学年より得点が有意に高かった。また、低学年において性別の単純主効果が有意であり ( $F(1, 211) = 14.00, p < .001, \eta^2 = .067$ )、女子が男子より得点が有意に高かった。さらに、高学年において性別の単純主効果が有意であり ( $F(1, 211) = 4.93, p = .028, \eta^2 = .024$ )、女子が男子より得点が有意に高かったが、効果量は小さかった。

## 考察

### 養育者への信頼感

分散分析の結果、低学年が高学年よりも有意に信頼感尺度得点が高かったことから、2年生や3年生になると信頼感が低くなると考えられる。

高橋 (1989) は青年期の分離個体化過程がどのような様相を持ち、どのような発達の変化をするのかを明らかにするために、小学6年生から大学4年生を対象に、separation-individuation test of adolescence 日本語版を作成した。これは「両親からの分離欲求」、「対人交流の拒否」、「自惚れ」、「共生欲求」、「分離個体化の達成」、「友人関係の確立」、「一人でいられなさ」の7つの因子から構成されており、これらの側面が年齢発達に伴いどう変動するかを検討したところ、小学6年生から大学4年生までの時期は大きく3つの時期に分類された。中学1年生まではまだ幼児対象との共生的な関係が残っている段階であり、中学2年生頃から分離個体化のさまざまな変化や自我の退行などの危機が起こり、大学入学以降徐々に分離個体化が達成され始め、青年の自我が安定していくと示されている。本研究の対象者においても、中学2年生頃を境に信頼感が低下していることから、信頼感の低下と親からの分離個体化の動きが関連している可能性が考えられる。ただし、この点については今後の検討が必要である。

### 攻撃性

因子分析の結果、「他者攻撃性」、「積極的行動」、「自責感」の3因子構造となった。これは安立 (2001) の結果とは異なっていた。安立 (2001) は「対象攻撃行動」、「積極的行動」、「自責感」、「自己破壊行動」、「猜疑心」の5因子モデルを採用している。本研究では「自己破壊行動」に含まれる項目の得点が低かったため、因子分析前や因子分析の過程でこれらの項目のほとんどが分析から除外された。そのため、「自己破壊行動」に相当する因子が抽出されなかったと考えられる。また、安立 (2001) は大学生を対象に尺度を作成しているが、本研究の対象は中学生であることから、尺度構成が異なると考えられる。安立 (2001) の「対象攻撃行動」と「猜疑心」の他者に対する攻撃性を示す2つの因子が、本研究では1つにまとめ「他者攻撃性」が抽出されたと考えられる。

分散分析の結果、「他者攻撃性」では、1、2年生において女子が男子よりも得点が高かったが、大きな差はみられなかった。攻撃性の性差に関して草野・石原 (2003) は、中学生では男子と女子で攻撃性の表出の仕方が異なり、女子は心理的な攻撃や物に当たるなどの間接的な攻撃行動を表出し、男子は直接的な攻撃行動を表出すると述べている。また、秦 (1990) は、身体的攻撃などの顕在的な攻撃は男子のほうが女子より多く表出するが、女子は直接的な攻撃行動を抑制するために、表面に表れないいらいだちや怒りなどの情緒的興奮が強くなる傾向があるのではないかと述べている。また、攻撃性の性差に関する研究を展望した Maccoby & Jacklin (1974) は、顕在的、身体的攻撃は男性がより表出しやすいが、言語的攻撃については一貫した結果が得られていないと報告している。

本研究における「他者攻撃性」には、他者に対する破壊的な行動に加え、他者から攻撃される恐れや他者に対する懐疑的な感情が含まれているが、叩く、蹴るなどの身体的攻撃を明確に示す項目はなく、「腹の立つ相手にはいやみとか皮肉を言ってやりたいと思う」などの言語的攻撃や、「まわりの人が敵に見えてしまうことがある」などの感情的な側面が多く含まれている。女子にみられや

すい攻撃性が多く含まれていたことから、女子のほうがわずかに得点が高くなったと考えられる。

「自責感」では、1, 2年生で女子が男子より得点が高いが、男子は学年が上がるにつれて得点が高くなり、3年生では性差がみられなかった。女子のほうがより「自責感」を感じやすいことについては、安立(2001)の結果と一致する。また、1,2年生でみられた性差が3年生ではみられなかったことについては、自責感の発達に性差がある可能性も考えられる。この点については今後の検討が必要である。

### 養育者への信頼感と攻撃性の関連

相関分析や分散分析の結果から、養育者への信頼感と攻撃性の関連を検討した。養育者への信頼感が高いほど「他者攻撃性」が高くなっていったが、その関連は強いとはいえないことが示された。また、養育者への信頼感と「自責感」にはあまり関連がないことが示された。本研究では、養育者への信頼感が高い者は、信頼感が低い者よりも自他への破壊的な攻撃性が低いという仮説を立てていた。しかし、養育者への信頼感と自他への攻撃性にあまり関連がみられないことが示唆された。

また、養育者への信頼感が高いほど「自分のやりたいことに向かって突き進んでゆく方である」などの「積極的行動」が高くなっていったが、その関連は強いとはいえないことが示された。養育者への信頼感が高い者は、信頼感が低い者よりも能動的な攻撃性が高いという仮説を立てていたが、養育者への信頼感と能動的な攻撃性である「積極的行動」にはあまり関連がみられないことが示唆された。

本研究では、信頼感を関係特性として捉え、特定の重要他者として養育者への信頼感を測定したが、攻撃性との関連においては、養育者への信頼感よりも、個人が安定してもつ信念として捉えられる個人内特性としての信頼感のほうが関連が強い可能性が示唆された。

## 研究 2

### 目的

中学生を対象とし、養育者から甘えを拒否される場面で生じる感情と自他への攻撃行動を測定し、それが親への信頼感とどのように関連しているかについて探索的に検討する。

### 方法

**対象者** 調査協力の依頼に承諾が得られた、A 県内の公立中学校 1 校に在籍する中学 1~3 年生 313 名に調査を実施した。

**手続き** 中学校の担任教師が教示を行い、クラスごとに集団法で回答させた。対象者への配慮から、家族を 1 人思い浮かべてもらい、対象者にとって親役割となっていると思われる養育者への信頼感を測定した。

### 質問紙の構成

1. 養育者への信頼感尺度：研究 1 で用いた尺度と同様のものを用いた。
2. 甘え行動が拒否される場面の提示：養育者への信頼感尺度の回答時に思い浮かべた「家族の人」を甘えの対象として、養育者に甘えようとしたが甘え行動が拒否される場면을提示し、対象者には物語の主人公になったつもりで読むよう教示した。甘え状況は、外山・高木(1991)が作成した「甘

え」の刺激文のうち、金銭に関するストーリーを一部改変し使用した。改変にあたっては、臨床心理学を専攻する大学院生2名と筆者で検討した後、中学校教員と一緒に検討し、最終的な刺激文を決定した。

3. 甘え行動が拒否された後の感情の測定：甘え行動が拒否された後に甘えようとした人が持つ感情として、自己非難的情動、他罰的情動、両面価値的情動、あきらめ感が想定されている(加藤, 2007)。これら4つの感情を下位尺度として想定し、甘え行動が拒否された後の感情尺度を作成した。質問項目は甘えの欲求不満に対する反応尺度(片岡, 2011)を参考に筆者が作成し、臨床心理学を専攻する大学院生2名が項目を検討し、最終的な項目を決定した。甘え行動が拒否される場面の物語を読んだ後、場面想定法を用いて、それぞれの感情をどのくらい感じると思うかについて、『そうは感じない』から『そう感じる』の5件法で回答させた。

4. 攻撃行動の測定：安立(2001)が作成した「攻撃性質問紙」を一部改変して用いた。「自責感」、「自己破壊行動」、「猜疑心」、「対象攻撃行動」の4つの下位尺度の中から12項目を選択して用いた。この尺度は大学生を対象に作成されており、中学生が回答する上で分かりにくい表現については、項目の内容が変わらない程度に変更を加えた。また、安立(2001)の尺度は表出傾向については実際に行動するかどうかを問うのではなく、あくまで欲求について問う項目となっているため、行動の測定ができるよう語尾を一部改変した。項目文中の「相手」を「家族の人」に変更し、養育者への信頼感尺度回答時に思い浮かべた「家族の人」を想定して回答させた。甘え行動が拒否される場面の物語を読んだ後、場面想定法を用いて、養育者に対しそれぞれの行動をどのくらいすると思うかについて、『全く当てはまらない』から『非常によく当てはまる』までの6件法で回答させた。

5. フェイス項目：性別、学年について選択式で回答を求め、「家族の人」として想定した人物を自由記述で回答させた。

## 結果

### 分析対象者

回答の得られた313名のうち、家族を1人思い浮かべるよう教示した際に、養育者を思い浮かべたと考えられる者を分析対象者とした。そのため、家族の人について記入する欄に養育者でない人を記入した者や、回答がなかった者は分析対象から除外した。また、回答漏れがある者も分析から除外した。分析対象者は228名(男子110名、女子118名。1年生72名、2年生71名、3年生85名)であった。

### 各尺度の検討

研究1同様、養育者への信頼感尺度5項目を加算した得点を信頼感尺度得点とした。信頼感尺度得点の平均値と標準偏差をTable6に示した。

甘え行動が拒否された後の感情尺度12項目に対して因子分析(主因子法、プロマックス回転)を実施した(Table7)。第1因子は「自分が甘えたことに対してすまなく思う」など、甘えたことを悪く思ったり、甘えたい気持ちへの諦めを示す6項目からなり、「あきらめ」と命名した。第2因子は「家族の人への不満を持ち続ける」など、相手への不満や怒りを示す5項目からなり、「不満」と命名した。各下位尺度の $\alpha$ 係数を算出したところ、「あきらめ」は $\alpha=.79$ 、「不満」は $\alpha=.81$ であり、尺

Table 6

養育者への信頼感尺度得点の平均値と標準偏差				
性別		学年		
男子	女子	1年	2年	3年
<i>M (SD)</i>				
27.44	26.19	28.42	26.65	25.54
(5.09)	(6.17)	(4.42)	(5.58)	(6.43)

Table 7

甘え行動が拒否された後の感情尺度の因子分析結果(主因子法・プロマックス回転)

		I	II
あきらめ	9 自分が甘えたことに対してすまなく思う。	.925	.141
	10 甘えたことに対し悪かったと思う。	.891	.109
	5 自分は甘えすぎてしまったと思う。	.603	.029
	3 仕方がないと思う。	.501	-.218
	7 甘えられなかったことを受け入れられる。	.376	-.074
	1 甘えるのはあきらめようと思う。	.356	-.224
不満	4 家族の人への不満を持ち続ける。	-.046	.802
	8 家族の人に対する怒りがおさまらない。	-.044	.796
	6 家族の人に悪い印象を持つ。	.005	.753
	12 家族の人にもっとかまってほしいと思う。	-.101	.701
	11 ふきげんになる。	.193	.363

  

因子間相関		II
I		-.434

Table 8

甘え行動拒否に伴う感情尺度の平均値と標準偏差

	性別		学年		
	男子	女子	1年	2年	3年
<i>M (SD)</i>					
あきらめ	3.48 (.83)	3.41 (.77)	3.51 (.71)	3.42 (.82)	3.40 (.85)
不満	2.16 (.81)	2.43 (.92)	2.12 (.79)	2.42 (.88)	2.36 (.93)

度の信頼性が確認された。これ以降の解析では、各下位尺度の項目平均値を下位尺度得点とした。下位尺度得点の平均値と標準偏差を Table8 に示した。

攻撃行動尺度 12 項目に対して因子分析(主因子法, プロマックス回転)を実施した (Table9)。第1因子は「自分の髪を引っ張ったり引き抜く」など、自分や他者に対する攻撃行動を示す6項目からなり、「自他への攻撃」と命名した。第2因子は「家族の人に反抗的な態度をとる」など、反抗的な態度や行動を示す3項目からなり、「反抗」と命名した。第3因子は「自分を責める」など、自分を責める行動を示す5項目からなり、「自責」と命名した。

Table 9  
攻撃行動尺度の因子分析結果(主因子法・プロマックス回転)

		I	II	III
自他への攻撃	2 自分の髪を引っ張ったり引き抜く。	.858	-.253	-.024
	8 家族の人を疑ってかかる。	.802	.188	-.068
	11 自分の皮ふをかきむしる。	.736	-.063	-.033
	7 家族の人を敵だと思う。	.734	.256	-.061
	6 自分を傷つける。	.638	.070	.178
	3 家族の人を警戒する。	.585	.251	-.020
反抗	10 家族の人に反抗的な態度をとる。	-.114	.918	-.058
	9 家族の人にいやみとか皮肉を言う。	.001	.882	.011
	5 他の人に当たる。	-.005	.744	.079
自責	4 自分を責める。	.115	.014	.797
	12 自分が悪かったと思う。	-.130	-.056	.608
	1 無理にがまんする。	-.024	.054	.489

因子間相関	II	III
I	.745	.280
II		.221

各下位尺度の $\alpha$ 係数を算出したところ、「自他への攻撃」は $\alpha=.90$ 、「反抗」は $\alpha=.86$ 、「自責」は $\alpha=.65$ であった。「自責」に関しては低い値であったが、尺度の信頼性が概ね確認された。各下位尺度の項目平均値を算出したところ、「自他への攻撃」と「反抗」に関しては、分布に偏りがみられ、得点が低い者が多かった (Table 10)。そのため、「自他への攻撃」と「反抗」は量的変数としては扱わず、「全くしない」、「ほとんどしない」「あまりしない」と回答した者を「行動しない」とし、「する」、「よくする」、「非常によくする」と回答した者を「行動する」とし、「自他への攻撃行動の有無」と「反抗行動の有無」として扱うこととした。「自責」に関しては分布に大きな偏りがみられなかったため、以下の解析では項目平均値を下位尺度得点として用いた。

#### 性差・学年差の検討

1. 甘え行動が拒否された後の感情尺度：性別と学年を独立変数、「あきらめ」下位尺度得点を従属変数として、 $2 \times 3$ の分散分析を行った。その結果、交互作用も主効果も有意ではなく、効果量は小さかった。性別と学年を独立変数、「不満」下位尺度得点を従属変数として、 $2 \times 3$ の分散分析を行った。その結果、交互作用は有意ではなかった。性別の主効果は有意であり女子が男子より得点が高かったが、効果量は小さかった ( $F(1, 222)=5.130, p=.024, \eta^2=.023$ )。

2. 攻撃行動尺度：性別と学年を独立変数、「自責」下位尺度得点を従属変数として、 $2 \times 3$ の分散分析を行った。その結果、交互作用は有意ではなかった。性別の主効果は有意であり女子が男子より得点が高かったが、効果量は小さかった ( $F(1, 222)=8.192, p=.005, \eta^2=.035$ )。2つの尺度について一部有意な性差がみられたが、効果量は小さかった。そこで、以降の分析では性別や学年で対象者を分類せずに分析することとした。

Table 10  
 攻撃行動尺度得点の平均値と標準偏差

	性別		学年		
	男子	女子	1年	2年	3年
	M (SD)				
自他への攻撃	1.37 (.64)	1.65 (.87)	1.37 (.54)	1.67 (.96)	1.51 (.79)
反抗	1.95 (1.02)	2.45 (1.30)	1.89 (.98)	2.43 (1.27)	2.29 (1.26)
自責	3.06 (1.08)	3.49 (1.03)	3.18 (1.12)	3.31 (1.01)	3.34 (1.10)

#### 養育者への信頼感と甘え行動が拒否された後の感情、攻撃行動の関連

養育者への信頼感と甘え行動が拒否された後の感情、攻撃行動の関連を検討するために、相関係数を算出した (Table 11)。養育者への信頼感と「あきらめ」の間には有意な弱い正の相関がみられた。養育者への信頼感と「不満」の間には有意な弱い負の相関がみられた。「あきらめ」と「自責」の間には有意な中程度の正の相関がみられた。

次に、養育者への信頼感の程度により甘え行動が拒否された後の感情尺度の下位尺度得点に差があるかどうかを検討した。まず、信頼感尺度得点の中央値の 28 点を基準とし、27 点以下のものを信頼感低群 ( $N=110, M=22.28, SD=4.75$ )、28 点以上のものを信頼感高群 ( $N=118, M=31.00, SD=2.23$ ) とした。信頼感高群と信頼感低群で「あきらめ」下位尺度得点に差があることを検討するために、Welch の  $t$  検定を行ったところ、信頼感高群が信頼感低群より有意に得点が高かったが、効果量は小さかった ( $t(204.99)=2.34, p=.020, d=.32$ )。信頼感高群と信頼感低群で「不満」下位尺度得点に差があることを検討するために、Welch の  $t$  検定を行ったところ、信頼感低群が信頼感高群より有意に得点が高かったが、効果量は小さかった ( $t(208.84)=3.16, p=.002, d=.42$ )。

養育者への信頼感、甘え行動が拒否された後の感情が攻撃行動の有無に与える影響について検討した。まず、「あきらめ」下位尺度得点の中央値の 21 点を基準とし、20 点以下のものを「あきらめ」低群 ( $N=107, M=16.67, SD=3.49$ )、21 点以上のものを「あきらめ」高群 ( $N=121, M=24.15, SD=2.48$ ) とした。また、「不満」下位尺度得点の中央値の 11 点を基準とし、10 点以下のものを「不満」低群 ( $N=102, M=7.61, SD=1.75$ )、11 点以上のものを「不満」高群 ( $N=126, M=14.65, SD=3.14$ ) とした。次に、攻撃行動尺度の各項目について、攻撃行動の有無を目的変数、養育者への信頼感の高低、甘え行動が拒否された後の感情の高低を説明変数として、強制投入法によるロジスティック回帰分析を行った (Table 12)。

自他への攻撃行動の有無について、「家族の人を疑ってかかる」、「家族の人を敵だと思う」という行動の有無に関しては、信頼感が負の影響を与えていた。「家族の人を警戒する」行動の有無に関しては、Hosmer と Lemshow の適合度検定によりモデルにデータがうまく適合していると判断できなかった ( $\chi^2=15.95, df=6, p=.01$ )。「自分の皮ふをかきむしる」、「自分の髪を引っ張ったり引き抜く」、「自分を傷つける」行動の有無に関しては、有意な結果が得られなかった。

反抗行動について、「家族の人にいやみとか皮肉を言う」行動の有無に関しては、養育者への信頼感と「あきらめ」が負の影響を与え、「不満」が正の影響を与えていたが、養育者への信頼感や「あ

Table 11

信頼感尺度得点と甘え行動が拒否された後の感情尺度、攻撃行動尺度の相関

	甘え行動が拒否された後の感情		攻撃行動
	あきらめ	不満	自責
養育者への信頼感	.283**	-.319**	.022
あきらめ		-.398**	.429**
不満			-.143*

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ 

Table 12

ロジスティック回帰分析の結果

説明変数	$\beta$	SE	Wald検定	有意確率 ( $p$ )	オッズ比 $Exp(\beta)$
自他への攻撃 8「家族の人を疑ってかかる」行動の有無					
信頼感	-2.35	1.07	4.89	.03	.09
あきらめ	-.08	0.67	.01	.91	.93
自他への攻撃 7「家族の人を敵だと思う」行動の有無					
信頼感	-2.48	1.06	5.44	.02	.08
あきらめ	-.70	.71	.98	.32	.49
反抗 10「家族の人に反抗的な態度をとる」行動の有無					
信頼感	-.83	.34	6.08	.01	.44
あきらめ	-.50	.35	2.13	.14	.60
不満	2.23	.44	25.13	.00	9.28
反抗 9「家族の人にいやみとか皮肉を言う」行動の有無					
信頼感	-1.58	.54	8.60	.00	.21
あきらめ	-.93	.52	3.13	.08	.40
不満	2.88	1.04	7.60	.01	17.78
反抗 5「他の人にあたる」行動の有無					
信頼感	-.94	.40	5.62	.02	.39
あきらめ	-.43	.40	1.16	.28	.65
不満	2.03	.56	13.02	.00	7.65
自責 4「自分を責める」行動の有無					
信頼感	-.57	.29	4.00	.04	.56
あきらめ	1.09	.31	12.15	.00	2.98
不満	.56	.31	3.29	.07	1.75
自責 12「自分が悪かったと思う」行動の有無					
信頼感	.21	.30	.50	.48	1.23
あきらめ	1.67	.32	27.50	.00	5.33
不満	.16	.32	.24	.63	1.17

「あきらめ」よりも「不満」の影響が大きかった。「家族の人に反抗的な態度をとる」、「他の人にあたる」行動の有無に関しては、養育者への信頼感が負の影響を与え、「不満」が正の影響を与えていたが、

養育者への信頼感よりも「不満」の影響が大きかった。

自責行動について、「自分を責める」行動の有無に関しては、養育者への信頼感が負の影響を与え、「あきらめ」が正の影響を与えていたが、信頼感よりも「あきらめ」の影響が大きかった。「自分が悪かったと思う」行動の有無に関しては、「あきらめ」が正の影響を与えていた。「無理に我慢する」行動については有意な結果が得られなかった。

## 考察

### 甘え行動が拒否された後の感情尺度

因子分析の結果、「あきらめ」と「不満」の2因子構造であると示された。尺度作成段階では、「自己非難的情動」、「他罰的情動」、「両面価値的情動」、「あきらめ感」の4つの感情を想定していた。しかし、本調査においては、「自己非難的情動」と「あきらめ感」が1つの因子にまとまり、「他罰的情動」と「両面価値的情動」が1つの因子にまとまったと考えられる。第1因子の「あきらめ」は、「すまなく思う」、「悪かったと思う」など自分に焦点が当たっている。一方、第2因子の「不満」は、甘える対象である養育者に焦点が当たっている。このように、甘え行動が拒否された後に生じる感情として、どこに焦点が向いているかという観点から2つに分けることができると考えられる。また、甘え行動が拒否された後の感情を細かく捉えていくには、この尺度では不十分であったとも考えられる。今後、尺度の検討が必要となると考えられる。

### 養育者への信頼感と甘え行動拒否に伴う感情の関連

中学生の養育者への信頼感と甘え行動が拒否されたときに生じる感情の関連を検討するため、相関分析と Welch の  $t$  検定を行った。養育者に甘えようとしてそれを拒否されたときに、養育者への信頼感が高ければ、拒否されたことを養育者の悪意と受け取りにくく、あきらめようとする気持ちが生じやすいが、養育者への信頼感が低ければ、拒否されたことを養育者の悪意と受け取りやすく、養育者に対し不満の気持ちを持ちやすいと予想した。結果より、養育者への信頼感が高ければ、養育者に甘えようとしてそれを拒否されたときであっても、あきらめようとする気持ちが生じることが示された。逆に、養育者への信頼感が低ければ、養育者に甘えようとしてそれを拒否されたときに、不満が生じることが示された。しかし、「あきらめ」と「不満」の両方において、養育者への信頼感との関連は強いとはいえなかった。そのため、「あきらめ」や「不満」が生じる要因として、養育者への信頼感以外の要因が関連している可能性が考えられた。

### 養育者への信頼感、甘え行動拒否に伴う感情が攻撃行動の有無に与える影響

養育者に対する猜疑心を抱くか否かについては、養育者への信頼感が負の影響を与えていた。養育者への信頼感が高ければ、甘えが養育者に拒否されたときに、養育者に猜疑心を持つことが少なくなると考えられる。また、これらの行動の生起には「あきらめ」や「不満」といった、甘えが拒否された後の感情が影響していないことが示唆されたことから、甘えが拒否された後にどのように感じていても、普段から認識している養育者への信頼感が影響する可能性が示された。

一方、自分に対する攻撃行動には、養育者への信頼感や甘えが拒否された後の感情は影響していなかった。清瀧 (2008) は、大学生の自傷行為経験には、自分に対する信頼感の低さと、外界に対する不信感の強さが影響を及ぼすことを示した。この研究では信頼感を個人が持つ信念であると捉

えており、発達的に変化はするものの、どの対人関係においても比較的安定しているものであると考えられる。つまり、自分に対する攻撃行動の生起には、養育者という限定された対象に対する信頼感ではなく、個人が安定して持っている対人的な信頼感や自己に対する信頼感が影響している可能性が考えられる。

「家族の人にいやみとか皮肉を言う」などの反抗行動の生起には、不満を持つことが影響していることが示された。養育者への信頼感の高さは、これらの行動の生起にあまり影響がなかった。青年期前期は養育者からの分離の動きが始まる時期であり、一般に「反抗期」とも呼ばれる時期である。養育者への信頼感の高さに関わらず、養育者の態度や行動に不満を持てば、反抗的な態度や行動を取るのではないかと考えられる。

また、「自分を責める」などの自責行動には、甘えが拒否された後にあきらめを感じるものが影響していた。自分の甘え行動が養育者に拒絶されたことは仕方ないとあきらめの感情を持つことで、甘えるべきでなかったと思ひ、自分を責める行動につながると考えられる。

## 総合考察

### 本研究の成果

本研究では、青年期前期に第二の分離個体化が始まり、親との関係性が変化することから、親や親役割をとっている養育者への信頼感と攻撃性の関連について検討することを目的とした。

研究1より、養育者への信頼感と自他への攻撃性や能動的な攻撃性である「積極的行動」にあまり関連がみられないことが示唆された。

研究2では、養育者への信頼感や甘え行動が拒否された後の感情が攻撃行動の有無に与える影響について検討した。養育者への甘え行動が拒否された後にどのように感じていても、普段から認識している養育者への信頼感が高ければ、養育者を疑ったり敵であると思ったりすることが少なくなると示唆された。一方、自分に対する攻撃行動の生起には、養育者への信頼感や甘えが拒否された後の感情が影響していなかった。自分に対する攻撃行動の生起には、養育者という限定された対象ではなく、個人内特性としての信頼感が影響している可能性が考えられる。「家族の人にいやみとか皮肉を言う」などの反抗行動の生起には、不満を持つことが影響していることが示された。養育者への信頼感の高さに関わらず、養育者の態度や行動に不満を持てば、反抗的な態度や行動を取るものと考えられる。また、自責行動の生起には、あきらめの感情が影響していることが示された。自分の甘え行動が養育者に拒絶されたことは仕方がないとあきらめの感情を持つことで、甘えるべきでなかったと思ひ、自分を責める行動につながると考えられる。

### 本研究の限界と今後の課題

1. 測定方法の問題：本研究では攻撃行動の測定として、甘え行動が拒否される場面を提示し、攻撃性質問紙を一部改変した尺度を用いて場面想定法により回答を求めた。提示した甘え行動が拒否される場面を読みながら、対象者がどれだけ甘え欲求を感じられたかが不明である。この方法の妥当性について、甘え欲求を測定するなどして、今後検討していく必要があると考えられる。
2. 一般化可能性：本研究の対象者は公立中学校1校に通う中学生であり、結果が一般的な中学生の

心理状態を示しているかについては検討の余地がある。特に、自傷行為などの自己へ向かう攻撃性については、「全く当てはまらない」と回答した者が大半であり、分布の偏りから十分検討することができなかった。今後は対象者を増やし、また調査方法も工夫する必要があると考えられる。

付記 調査にご協力いただいた中学校の先生方、生徒の皆さんに感謝申し上げます。

#### 引用文献

- 安立奈歩 (2001). 攻撃性の諸相に関する研究 京都大学大学院教育学研究科紀要, **47**, 475-487.
- Blos, P. (1967). The second-individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, **22**, 169-186.
- Cynthia, J. G. & Walter, C. S. (1982). Measurement of specific interpersonal trust: construction and validation of a scale to assess trust in a specific other, *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 1306-1317.
- 土居健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文堂
- Hale, W. W., van der Valk, I., Engels, R. & Meeus, W. (2005). Does perceived parental rejection make adolescents sad and mad? The association of perceived parental rejection with adolescent depression and aggression. *Journal of Adolescent Health*, **36** (6), 466-474.
- 浜崎隆司・田村隆宏・吉田和樹・吉田美奈・岡本かおり・安藤ときわ・倉成正宗 (2012). 親子の信頼関係尺度に関する予備的研究 鳴門教育大学研究紀要, **27**, 25-31.
- 秦一士 (1990). 敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究, **61** (4), 227-234.
- 林もも子 (2012). アタッチメントと思春期臨床 小林隆児・遠藤利彦 (編) 「甘え」とアタッチメント—理論と臨床— 遠見書房 pp.277-288.
- 廣井亮一 (2002). 子どもの攻撃性に関する一考察—少年非行の現状を通して— 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, **12**, 137-149.
- 加藤和生 (2007). 対人相互作用過程における社会的メタ認知の特徴—甘え行動・交流の分析を通して— 心理学評論, **50** (3), 297-312.
- 清瀧裕子 (2008). 青年期における攻撃行動および自傷行為について—対人的信頼感、アレキシサイミア傾向、Locus of Control との関連から— 心理臨床学研究, **26** (5), 615-624.
- 小林美緒・加藤和生 (2007). 「情緒的甘え」と「道具的甘え」との区別の実証的意義の検討：青年期の甘え欲求の違いと甘えタイプからの分析を通して 九州大学心理学研究, **8**, 41-52.
- 小西勝一郎・野村和子 (1983). 中学生の攻撃性と親子関係に関する研究 大阪市立大学生活科学部紀要, **31**, 293-299.
- 草野由紀子・石原金由 (2003). 中学生の対人ストレスが攻撃行動に及ぼす影響とソーシャルサポートの効果について ノートルダム清心女子大学児童臨床研究所年報, **16**, 100-110.
- Maccoby, E. E., & Jacklin, C. N. (1974). *The psychology of sex differences*. Stanford, CA: Stanford University Press.

- 松田君彦・児島晃代 (2003). 親の叱りことばの表現と子どもの受容過程に関する研究 (1) 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編, **54**, 187-203.
- 水野将樹 (2003). 心理学研究における「信頼」概念についての展望 東京大学大学院教育学研究科紀要, **43**, 185-195.
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2013). 平成 24 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 2013 年 12 月 10 日 <[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/25/12/\\_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1341728\\_01\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1341728_01_1.pdf)> (2014 年 1 月 24 日)
- 大迫弘江・高橋 超 (1994). 対人的葛藤事態における対人感情及び葛藤処理方略に及ぼす「甘え」の影響 実験社会心理学研究, **34 (1)**, 44-57.
- Rempel, J. K., Holmes, J. G. & Zanna, M. P. (1985). Trust in Close Relationships, *Journal of Personality and Social Psychology*, **49 (1)**, 95-112.
- 酒井 厚 (2001). 青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み— 性格心理学研究, **9**, 59-70.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 (2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, **50**, 12-22.
- Storr, A. (1968). *Human aggression*, London: Penguin Press. (高橋哲郎 (訳) (1973). 人間の攻撃心 品文社)
- 高橋蔵人 (1989). 青年期における分離個体化に関する研究—質問紙調査による考察— 心理臨床学研究, **7 (2)**, 4-14.
- 谷本泰子・笠井達夫 (2008). 青年期における人間信頼感・自己存在感と攻撃性の関連 徳島文理大学研究紀要, **76**, 65-79.
- 外山嘉奈子・高木秀明 (1991). 青年期の「甘え」の心理に関する一研究—「困った」場面の分析を通して— 横浜国立大学教育紀要, **31**, 79-103.
- 渡邊賢二・平石賢二・信太寿理 (2009). 母親の養育スキルと子どもの母子相互信頼感, 心理的適応との関連 家族心理学研究, **23 (1)**, 12-22.
- 山崎勝之 (2002). 第 2 章 発達と教育領域における攻撃性の概念と測定方法 山崎勝之・島井哲志 (編) 攻撃性の行動科学—発達・教育編— ナカニシヤ出版 pp.19-37.